

仮設訪問

「笹谷東部応急仮設住宅訪問」

桜の聖母高校生 22 名が担当教師と一緒に笹谷の仮設を訪問したのに同行した。ちょうど福島大学生の足湯サービスと一緒にあった。182 棟の仮設には、現在浪江町の人びとが入居されている。その一部はペットを飼うことができ、避難者の癒しとなっていた。仮設住宅は住宅地の中にあり、近くに広い公園、商店街、学校、病院、そして駅にも近い。独居の高齢者の軒先には、非常事態を知らせる赤いランプが設置されていた。高校生以下の子供が 50 人いると聞いた。自治会を中心にしてコミュニティ作りをされている。

桜の聖母高校生の呼びかけに応じてくださった人びとと一緒に公園を散歩した。中には足の不自由な高齢者もおられた。散歩のあと、福島大学生の足湯のグループと共に集会場に集まって来られた大人、こどもたちと和やかに話が弾んだ。若々しい優しい手での足湯、マッサージに皆さんの顔はほころんでいた。人間関係の基本は、やはり触れ合うことだと感じた。

K さん（男性）と Y さん（女性）から、信憑性を感じられなくなった政府、東電に頼っていても埒あかないので浪江には帰らない、復興住宅に移ることにしたとの話を耳にした。ここで気持ちが通じ合い、よいコミュニティになってきているので、ばらばらになって人間関係を崩したくないともいわれた。「帰りたいけど帰れない」との言葉も明るく言われたのが印象的だった。思いがけない「浪江やきそば」のもてなしに感激した。(F)



災害公営住宅笹谷団地の建設が予定されている県有地

原発労働

「川崎水曜パトロールの会」2011.8.1 発行の『特集：原発就労体験を語る』のコピーを送ってもらった。10 数年前から原発で就労したことのある路上生活者へのインタビューをまとめたものだ。福島第一原発の事故前からの原発労働者の現状が、淡々と述べられるインタビュー記事に様々な思いを募らせた。ウエスで配管を拭いたり、線量計がなったり、フィリピン人と一緒に仕事をした話など。そして 18 歳から原発の仕事をしていた労働者は、先輩たちが「あなたは若いんだから、ここからは駄目」といつも気遣い、一番危険な区域には入らなかったという話など、福島第一原発の事故が起こるまでもに様々な現実があったのに、それにしっかりと向きあってこなかったことに気づかされた特集だった。(N)

乳児の内部被ばく検査機器

「BABY SCAN ベビースキャン」乳幼児の内部被ばく検査機器 内部被ばく検査用のホールボディーカウンター（WBC）による検査は、2011 年から実施されている。子どもに関しては、乳幼児だけが内部被ばくしていて、保護者が被ばくしていない状況は考えられないので、科学的には、乳幼児の WBC 検査は必要ないそうだ。しかし、小さな子を持つ家族からは、内部被ばくの不安の声が続いていた。これは、WBC が大人の使用を前提に作られており、身長が低い乳幼児を調べるのが難しかったことにもよるといふ。

そこで、乳児から 130 センチまでの子ども用検査機器が開発された。世界初のベビースキャンは、2013 年 12 月 2 日に福島県石川郡平田村のひらた中央病院に導入され、無料で運用が開始された。大人用の立位検査ではなく、4 分間、横になって検査を受ける。横から声掛けできるような形になっており、仰向けにな

ればアンパンマンが、うつ伏せになれば iPad でアニメを見たり、ピアノを弾いたり、と子どもが飽きないように、随所に工夫が施されている。『12月2日から1月中旬までに検査を受けた子どもは500人を超えたが、放射性セシウムが検出された子どもは一人もない。』（東京大学早野教授の報告より）測定結果は検査当日に家族に渡され、医師や病院スタッフが、検査内容を丁寧に説明する。2014年5月からは、いわき市の常磐病院、7月からは南相馬市立総合病院での検査が始まる。(S)



ベビースキャンの運用の準備を進める関係者（2014.7.1『福島民報』の写真より）

帰還について

戻らないと決めている理由(複数回答：回答率が比較的高い項目)

市町村	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
川俣町	49.3	36	49.3	48	34.7	48	18.7	29.3	22.7	22.7	30.7	50.7	32
南相馬市	48.7	64.1	53.5	52.2	54.5	48.8	30.7	30.5	23.1	31.2	33.5	38.2	34.4
飯館村	72.8	42.8	51	53.5	45.9	45.4	12.9	38.1	26.9	23.2	32.3	51	32.5
楢葉町	50.9	70.2	54.3	54.5	65.8	47	18.9	35.3	26.8	28.7	19.6	-	30.4
浪江町	62	68.9	68.4	60.5	62.3	53.3	42.7	36	31.7	36.2	53.1	37.2	37.4
大熊町	73.2	71.2	67	69.1	68.3	58	45.3	29.5	28.4	39.8	64.8	33.4	40.1
葛尾村	61	59	66	46	55	38	28	46	36	28	33	50	26
富岡町	67.7	67.3	64.3	65.5	63.9	52.6	41.7	31.8	29	35.7	55.9	40.7	36.8
双葉町	67.6	69.5	66.7	65.7	64.8	57.9	46.3	30.6	30.1	38.9	67.6	39.2	37

- ①放射線量が低下せず不安 ②原発の安全性に不安 ③生活用水に不安 ④商業施設がもとに戻りそうにない
 ⑤医療環境に不安 ⑥家が劣化し住める状況にない ⑦交通インフラに不安 ⑧町外への移動交通が不便
 ⑨戻っても仕事が無さそう ⑩介護・福祉サービスに不安 ⑪帰還まで時間がかかる ⑫避難先の方が生活利便性が高い
 ⑬他の住民も戻りそうにないから

(資料：復興庁「原子力被災自治体における住民意向調査」より)

あぶくま抄

「あの日以来、たびたび耳にし、目にする言葉がある。ふるさと。以前は触れれば懐かしさとぬくもりが胸いっぱい広がった。今は何と物悲しく、切なさを伴う4文字になってしまったのだろう。原発事故を受けて会津若松市に住んでいた大熊町の女性が今春、家族の待ついわき市に居を移した。仕事の関係で別々に過ごした期間は3年余に及んだ。今度は夫や子どもたちの顔を見ながら暮らせる。いわきは生まれ育った土地と気候風土が似ている。心が安らぐ。でも温暖の地で時折、雪国での時間がよみがえる。自身の心に問う。「どうしてなんだろう」。所用でたまにいわきから会津を訪れる。磐越道を車で走っていて磐梯山が見えてくると「ああ、戻って来たんだなあ」、東山温泉を通ると「そうそう、この旅館に避難していたんだ。川沿いの道を歩きながら滝を眺めたっけ」。さまざまな思いが込み上げる。来訪を待っていてくれる友人たちもいる。離れてみて初めて分かった。仮住まいだと思っていた日々が、いつの間にか掛け替えのないものになっていた。「会津も、自分にとって間違いなくふるさとだったんだ」。4文字の響きは、やはり優しく温かい。」 (『福島民報』7/14)

この記事に接してあらためて、仮設住宅での生活が長期化している、ある人々の心のうちを見せてもらったように感じた。「ふるさと」—この4文字がそれぞれの人にもたらしている微妙な響き。一人ひとりが「ことば」から受け取るニュアンスのデリケートさに繊細であり続けたいと思った。(N)